

鈴木信太郎記念館だより

第2号

庭園を彩る四季折々の植栽 —春の植物編—

記念館といえば建物の意匠や館内の展示物に目が行きがちですが、庭園も季節ごとの植栽を楽しむことができます。各樹木には2019年5月より樹名板を設置していますが、これまで植栽を紹介する機会がありませんでした。今回は庭園の植栽より、春が見頃となる植物をいくつかご紹介いたします。

庭園で一番目を引く樹木は、アプローチの両側にあるクスノキでしょう。目通り約55cm、樹高約10mと約6.5mある非常に大きな常緑樹で、当館のシンボルツリーといえます。クスノキは枝葉も非常に多く、数年に1回の頻度で強剪定(幹や太い枝を切り落としてコンパクトにする事)を行っています。直近では2019年4月に行いましたが、1年余り経った現在では既に剪定前と同じくらいの枝葉が広がっており、その生命力の強さが見て取れます。

ユキヤナギは敷地南西端のあまり目立たない位置にありますが、3月末から4月にかけて小さな花を枝一面に咲かせ、春の訪れを感じさせる植物です。ユキヤナギは名前の由来通り、雪のように白い花が一般的ですが、当館の品種は蕾が濃いピンク色をしており、花弁は外側がピンク色で内側にいくにつれて白色へと変化していきます。

クリシマツツジは元々あったものではなく、記念館開館後に新たに植えたものです。ツツジと豊島区は関わりが深く、江戸時代前期に薩摩(現鹿児島県)原産のクリシマツツジ三種が染井(現豊島区駒込)の植木屋伊藤伊兵衛に下賜されたことから始まります。伊兵衛はクリシマツツジの栽培に成功し、染井のツツジは全国に広まってきました。そうした経緯もあり、豊島区の花はツツジとなっています。見頃は4月中旬から5月上旬に掛けてで、濃い赤色の小さな花弁で樹木全体が深紅に染まります。

ご来館の際には庭園の植栽もご覧いただければと思います。他の時期の植栽については、またの機会にご紹介いたします。(木下)



▲強剪定直後のクスノキ (2019年4月撮影)

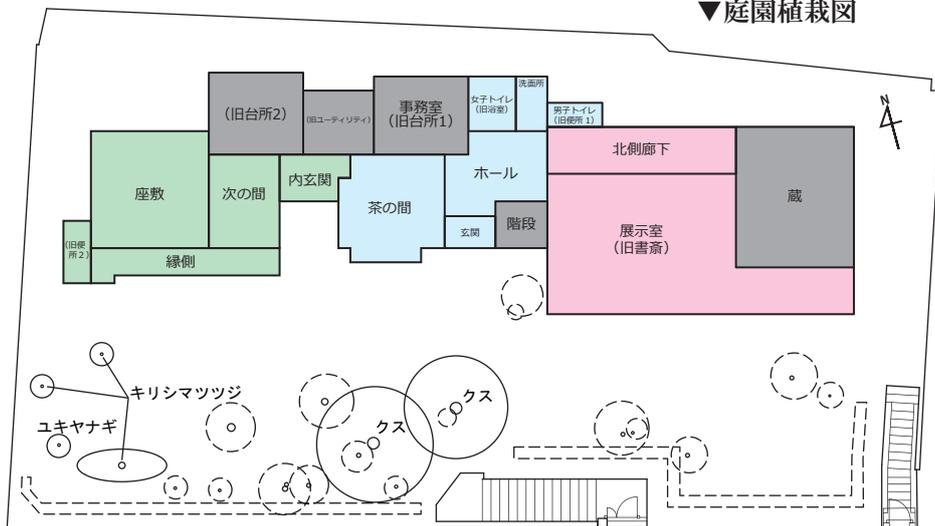


▲ユキヤナギ (2019年4月撮影)



▲クリシマツツジ (2019年4月撮影)

▼庭園植栽図



2019年度展示関連事業について

常設展示内「信太郎の愛蔵書」コーナーでは、ステファヌ・マラルメの代表作『半獣神の午後』(1876年)をテーマとした展示を行っています(2019年5月7日～2020年5月2日)。この展示にちなんだ以下の事業を開催しました。

I 講演会「マラルメ『半獣神の午後』への招待」

難解と言われるマラルメ詩の世界を、美術(マネ)・音楽(ドビュッシー)・バレエ(ニジンスキー)の鑑賞も交えてご紹介いただきました。マラルメやその作品に登場する「半獣神」が人間味を帯びた身近な存在になりました。

[日 時] 2019年5月18日(土) 14:00-16:00

[講 師] 川瀬武夫氏(早稲田大学文学部フランス語フランス文学コース教授)

[参加者] 23名 [会 場] 南大塚地域文化創造館



▲川瀬氏による講演会の様子

II 演奏会「ドビュッシーの音楽とフランス詩の協演 — ラの音を求めて —」

À la recherche du *la* : la musique de Debussy et les poèmes français.

『半獣神の午後』からインスピレーションを受けて作曲された「牧羊神の午後への前奏曲」をはじめ、没後101年を迎えたクロード・ドビュッシーの音楽を、信太郎が訳したフランス詩の朗読と共に紹介しました。演奏会ではほとんど聞く機会のない「付随音楽 ビリテイスの歌」にうっとり聞き入るお客様の姿が印象的でした。

[日 時] 2019年8月25日(日) 14:00-15:30

[出 演] 山崎英恵氏(ヴァイオリン)、山内のり子氏(ピアノ)、石井環世氏(朗読)



▲演奏会の様子(左より石井氏、山内氏、山崎氏)

[来場者] 225名 [会 場] 南大塚ホール

[主催] 豊島区、公益財団法人としま未来文化財団 [後援] 在日フランス大使館 / アンスティチュ・フランセ日本

南大塚地域文化創造館文化カレッジ「フランス文学とフランス文化に親しむ」

(鈴木信太郎記念館・学習院大学文学部フランス語圏文化学科共同企画)

文学という枠にとどまらず、音楽・映画・演劇等さまざまな切り口から、学習院大学文学部フランス語圏文化学科の先生方にお話いただき、フランス文化の魅力や面白さを再発見する機会となりました。「フランス文学なんて全然縁がなかったのですが、素晴らしい先生方が毎回、熱く語ってくださるのが、[...]ゼイタクでもったいなくて、幸せな時間でした。」といった受講者からのお声も頂戴しました

[日 時] 2019年9月7日、14日、21日、28日、10月5日、12日*、19日、26日(全8回)毎週土曜、14:00-15:30

[受講者] 48名 [会場] 南大塚地域文化創造館、鈴木信太郎記念館(第6回)*台風接近にともない11月2日に延期

[講師及び内容] ①鈴木雅生教授「フランス文化への旅立ち～サン＝ラザール駅を出発点に」②大野麻奈子准教授「不条理演劇と日本～サミュエル・ベケットを中心に」③志々見剛准教授「モンテーニュと魔女狩り」④中条省平教授「フランス映画黄金時代の一情景～ルナールの『にんじん』とデュヴィヴィエの『にんじん』」⑤ティエリ・マレ教授「詩からシャンソンへ」⑥鈴木信太郎記念館学芸担当「フランス文学者鈴木信太郎の生涯と鈴木信太郎記念館」⑦田上竜也教授「ヴァレリーと鈴木信太郎～〈20世紀最大の知性〉と日本におけるフランス文学研究の黎明」⑧吉田加南子名誉教授「愛のフランス詩～中世から現代まで」

(永嶋)

兎に角俺達はベルジュラックを愛してみたからね

— 『シラノ』がつかないだ鈴木信太郎と辰野隆の友情 —

鈴木信太郎 (1895-1970) と辰野隆 (1888-1964) (図1)。わが国のフランス文学研究黎明期を代表する二人の人物は、公私ともに親しい友人としても知られています。二人の生涯を「縄のやうに[……]絡み合せてある」のが、彼らが共訳したエドモン・ロスタン作の戯曲『シラノ・ド・ベルジュラック』(Cyrano de Bergerac 1897年初演、以下『シラノ』)です。 図1 信太郎(右)と辰野(左)▶



1917(大正6)年秋、東京帝国大学仏文学科の学生だった22歳の信太郎は、研究室の副手だった7歳上の辰野と共に、彼らを指導するエミール・エックに頼み込んで『シラノ』の講読を始めました。作品に魅せられた二人は翌年から日本語訳に着手し、前年に創刊した同人誌『玫瑰珠』に一幕ずつ発表していきました。互いの訳文を何度も交換し意見を戦わせながら訂正を重ねる共同作業で、誰がどの部分を担当したのかもわからなくなり「得意のせりふはお互いに自分の訳だと思つてゐる」のだといいます。2年にわたる熟考の末、二人は訳文をほぼ全て暗記し、後にフランスで芝居を観ても自分たちの台詞が浮かんで来たそうです。そして今から100年前の1920(大正9)年に、彼らは『シラノ』を訳了しました。その時の気持ちを、辰野は信太郎にこう語っています¹。

僕はシラノを訳した。肚に溜まつてみたものを下して了つたやうな気がする。晴々したやうでもあり、力が抜けたやうでもある。兎に角俺達はベルジュラックを愛してみたからね。

信太郎は次第に稀覯本の収集に力を注ぐようになりますが辰野に収集癖はなく、互いを「書豚」、^{ブリオ・コジョン}「本は読めればよし」の「書狼」と呼び合います。辰野はある日、17世紀に実在したシラノに関する大変貴重な本を入手します。『シラノ・ド・ベルジュラック ポン・ヌフ橋畔にてブリオッシュの猿と格闘』(Combat de Cyrano de Bergerac avec le singe de Brioché au bout du Pont-Neuf 1704年刊、当館蔵)です²。初版はすべて失われ、唯



▲図2

一残った再版とされるこの本には、19世紀初頭のロマン派を代表する小説家で、忘却の淵に沈んだシラノを再発見・評価したシャルル・ノディエらの蔵書票が貼付されています(図2)。元は九州帝国大学の仏文教授、成瀬正一の所蔵でしたが、上京時に世話になった礼として辰野に贈呈されました。辰野は信太郎と、彼らの共通の友人で同じく愛書家の山田珠樹^{たまき}を前に、「欲しければ与つてもいいよ」とこの本を出したところ、「その瞬間に一全く打てば響くと言うか、電光のよな速さで」信太郎が先手を打つたと冗談交じりで語っています。

『シラノ』は1922(大正11)年に、二人の恩師エックと、文豪・森鷗外の序と共に白水社から刊行され、その後も版を重ね、出版元を変えながら今日まで刊行されています。また舞台では、1931(昭和6)年を皮切りに戦前は3回、戦後は1951(昭和26)年の文学座公演以降、度々脚本として用いられています。

1964(昭和39)年2月28日、その年の4月から上演予定だった舞台の完成を見ることなく、辰野はこの世を去ります。病と闘う友の姿に、信太郎は彼らが愛したシラノの「羽根飾」を見たのかもしれませんが。

運動で鍛へ上げられた辰野の心臓は、強力であつた。肉體が蝕まれるのに、断固と抵抗した。『シラノ』を二人で約半世紀前に翻訳した時、その最期のところで死霊に向つて、「俺ゃ勝利の望みがある時ばかり戦ふのたあわけが違ふぞ！負けると知つても戦へばこそ勇ましきもひとしほだあ！」と訳したが、その気持が毎日感じられた。

(永嶋)

1 辰野から信太郎宛の葉書(1920年1月7日付)、当館蔵

2 この本に関して、詳しくは「<鈴木信太郎記念館>の資料たち 第15回」(『かたりべ』129号、豊島区立郷土資料館、2018年)参照。

【参考文献】鈴木信太郎「辰野隆前会長の思出」、「辰野の病氣」、「本の雑談」(すべて『鈴木信太郎全集』第5巻所収、大修館書店、1973年) / 辰野隆「書狼書豚」『え・びやん』、白水社、1933年

記念館からのお知らせ・ご案内

ギャラリートーク

毎月第3土曜日の午後2時より約40分間、フランス文学と建築、両分野の担当学芸員によるギャラリートークを行っています。内容は毎回異なりますので、何回でもお楽しみいただけます。事前申し込みは不要ですので、お気軽にご参加ください。

[4月～6月のトークテーマ(予定)]

4月18日(土) 建築に関するお話

5月16日(土) フランス文学者鈴木信太郎

6月20日(土) 建築に関するお話



▲ギャラリートークの様子

外国人向けガイド・ツアー

2020年4月より、外国人向けガイド・ツアーを開始します。外国人の方を対象に約40分間、当館学芸員が外国語(英語・フランス語)で見どころをご紹介します。ふるってご参加ください。

[日 時] 毎月第1・3金曜日 11:00～(英語) / 14:00～(フランス語)

4月3日・17日、5月1日・15日、6月5日・19日

* 事前申し込み不要(5名以上でお越しの際は事前にご連絡ください。)

* ギャラリートークと外国人向けガイド・ツアーは諸事情により変更・中止となる場合があります。最新情報については館内掲示やホームページをご確認ください。

展示替えとそれにともなう臨時休館のお知らせ

フランス文学に関する常設展示のうち、「信太郎の愛蔵書」コーナーでは、現在の『半獣神の午後』から、5月15日(金)より『シラノ・ド・ベルジュラック』に関する展示替えを行います。信太郎が辰野隆と共訳し、完成から100周年の今年、皆様のお越しをお待ちしております。この展示替えにともない、下記の期間中は臨時休館いたします。ご来館を予定されていた方にはご迷惑をお掛けしますが、何卒よろしく願いいたします。

[期 間] 2020年5月7日(木)～5月14日(木)

メールマガジン「鈴木信太郎記念館ニュース」のご案内

当館の最新情報をお伝えするメールマガジン「鈴木信太郎記念館ニュース」を配信しています。講演会やイベント情報、展示のご案内や休館情報などを不定期配信でお知らせしています。配信をご希望される方は、当館ホームページよりご登録ください。

鈴木信太郎記念館だより 第2号

発行日 2020年3月13日

発 行 豊島区

編 集 豊島区立鈴木信太郎記念館

〒170-0013 東京都豊島区東池袋5-52-3

TEL: 03-5950-1737

<http://www.city.toshima.lg.jp/bunka/bunka/shiryokan/index.html>

